

新指定文化財紹介



名称：関口家文書

所在：東秩父村大字皆谷

概要

関口家は戦国時代松山城主・上田氏の有力家臣の家系で久兵衛は皆谷の光官寺（曹洞宗）を開基している。江戸時代末期に絶家となった。

関口家の資料は武兵衛家が引きついでいる。武兵衛は、明治維新後は武平と称し、皆谷村の戸長、その子・直温は明治22年に槻川村初代の村長、次の可学は村会議員、郡会議員、さらに7代村長（大正4～8年）に就任した。所蔵される文書は近世資料3004点、近・現代資料1303点で総点数は4307点となる。

近世資料では享保17年から明治3年までの「御用留」（51点）、「宗門人別帳」（26点）や五人組帳、年貢関係等があり近世村落を知る手がかりとなる。

御堂・奥沢両村と白石村との山論（貞享～元禄期）や地頭林との境論（弘化2年）等の山をめぐる争いや相続・家出など戸口・身分に関する資料も多い。また、田畑、山林の質地・譲り証文からは幕末期に土地移動が激しかったことが分かる。農間稼ぎに水車稼ぎ、駄賃稼ぎがあったが、特に駄賃稼ぎからは峠越えの物資の移動が見て取れる。

徳川氏の関東入国直後の慶長年間より、白石村と大野村（ときがわ町）が江戸城へ上納した「大河原炭」に関する宝永3年（1706）から明和3年（1766）まで約120点の関連資料は安戸村古文書（村指定文化財）と合わせて白石－安戸ルートの御用炭の解明に参考となる。

近・現代資料には、明治大正期の農村を理解する参考となる予算・決算書、村会書類、議案綴や衛生関係など行政の基礎資料がある。地租改正事業の関係も多く、また、寺社、戸籍、金融など資料は多岐にわたる。

教育資料では明治6年（1873）に最初の皆谷学校が関口家の長屋で開校した。その後、明治16年には一村一学校の設置願を県へ提出する等、同34年（1901）に坂本字鍛冶屋へ新築移転（村立西小学校、現在は廃校）するまで皆谷と坂本の寺社や民家等に学校は何度も移動していることが伺える資料がある。

この他製糸関係文書が100点余あり、当地域の積極的な蚕糸業活動として注目される。当時、座繰りした生糸は器械製糸の普及により品質・販売面からも対抗できなかった。そこで座繰りの生糸を共同揚げ場（揚返所）に集めて糸の太さ・品質によって区別する等、品質改良や共同販売を行うようになった。皆谷工場の設立年は不明であるが、明治36年（1903）5月の秩父郡の改伸社への加盟願からもそれ以前のことであろう。大内沢にも大内組が設立され、槻川村内に二つの組合製糸が稼動したことを記録している。

以上のように関口家文書は、総点数が4307点（近世資料3004点、近現代資料1303点）と村内で最も多く、その内容も多岐にわたり、皆谷地区のみならず当地方の近世、近・現代に至る歴史を伝える貴重な資料であり、村指定有形文化財に指定された。